

向島捕虜収容所のメモリアルプレート除幕式

小林皓志

2013年4月15日、広島県尾道市向島にあった向島捕虜収容所（終戦時の正式名称は広島俘虜収容所第4分所）跡で、2つのメモリアルプレートの除幕式が行われました。1つは元収容所のレンガ壁に2002年に設置された英国兵のメモリアルプレートに移設したもの、もう1つはその後に死亡が判明した米国兵捕虜のために新設したものです。前者には英国兵23名の名前と慰霊の言葉、後者には米国兵1名の名前と収容所の概要が刻まれています。

式典には、米海兵隊岩国航空基地のジェームス C. スチュワート司令官、大阪の英国総領事館のサイモン・フィッシャー総領事、尾道市副市長郷力和晴氏、地元関係者、向島中央小学校4年生73名など計約120名が参列し、POW研究会会員3名も東京や京都から駆けつけました。「日英米友好モニュメントの会」の世話人でPOW研究会会員でもある小林皓志の司会により、ギター演奏「アメージング・グレース」、聖書朗読とお祈り、仏教による法要、除幕、献花、来賓挨拶と続き、厳かな中にも盛大な慰霊祭となりました。

以下に、向島捕虜収容所の概要とメモリアルプレート設置の経緯についてご紹介します。



2つのメモリアルプレート（左は英国兵、右は米国兵）に献花する（左から）小学生、フィッシャー総領事、スチュワート司令官

■向島収容所の概要

1942年11月27日、広島県御調郡（現・尾道市）向島西村の向島紡績（株）の敷地内に、八幡仮俘虜収容所向島分所として開設されました。ジャワで捕虜となりシンガポールから大日丸で移送されたイギリス兵100人が収容され、島内の日立造船所で使役されました。

（※収容所の名称は何度か改称され、終戦時の正式名称は広島俘虜収容所第4分所）

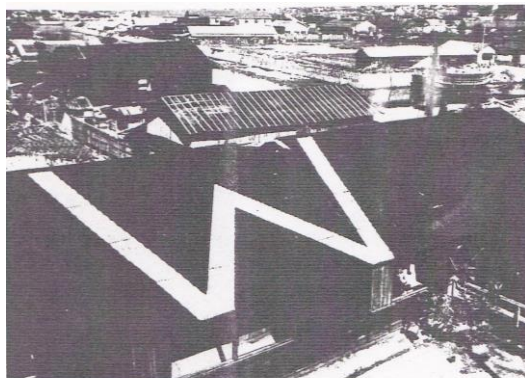
1944年9月、フィリピンから能登丸で移送されたアメリカ兵100名が収容されました。

1945年8月15日、終戦。まもなく向島の地で初めて星条旗が掲揚されました。これは米軍機が食料をパラシュートで投下したそのパラシュートの布で間に合わせに作ったもので、日本で最初の掲揚とのことです。初めての星条旗掲揚に際して、クリフォード・オムトベット軍曹は次のように述べています——「それぞれの捕虜の痩せこけた頬からは涙がこぼれ落ちた。何人かは飢えのため非常に弱っていて、気を付けの姿勢で立つこともほとんど出来なかった」。

終戦までに、病気などでイギリス兵23名、アメリカ兵1名が亡くなっていました。

8月20日、新たにアメリカ兵10名が加わりました。彼らは爆撃機B-29（ニックネーム：Nip Clipper）の搭乗員で、終戦直前の8月8日に北九州沖50マイルの日本海で撃墜され、機長は死亡、残りの10名は海上にパラシュート降下して漁船に救助され、広島の中隊司令部を経て向島に連れてこられたのです。（※2005年8月17日、この10名のうち当時唯一の生存者Martin Zapf氏（当時79才）が夫人と共に収容所跡を訪問しています）

9月13日、解放された捕虜たちは星条旗を掲げて尾道港まで行進し、帰国の途に着きました。



向島収容所の英国兵宿舎。終戦直後に撮影。

■メモリアルプレート設置の経緯



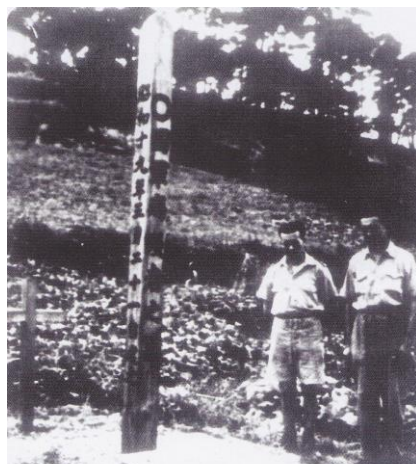
収容所のあった赤レンガ壁の建物 2001年撮影

収容所だった赤レンガ壁の建物は95年前に織布工場として建設されましたが、昭和3年頃に海軍に借り上げられ、戦時中は捕虜収容所として使用され、昭和23年から紡績工場（向島紡績）として使われるようになりました。

1998年11月、英国から元捕虜と遺族の団体24名（団長：恵子ホームズ氏）が向島を訪問しました。訪問団の中には向島にいた捕虜が1名い

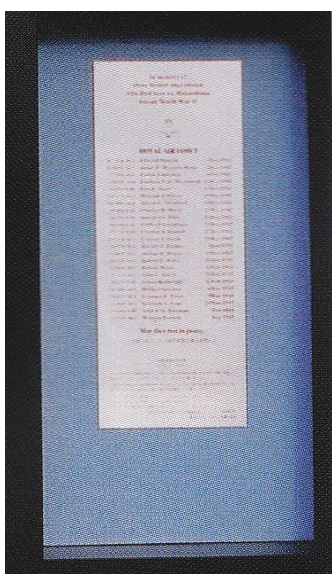
ました。名前はノーマン・ウイドレイク。彼は墓標の写っている 1 枚の写真と、向島で亡くなった 23 名の英国兵捕虜の名前を書いたプレートの写真（うち 1 名は終戦直後に亡くなったため、遺骨は英国に送還されたとのこと）を私にくれました。

訪問団の帰国後、対応した我々 10 名は反省会を開きましたが、その席でシベリア帰りのお年寄り(故・江頭悟氏)が「この写真に写っている墓標は向島のどこかの山中にあるはずだ。我々が知らないとしたら、日本人の恥だ！」と声を荒げました。それから我々関係者は収容所近くの丘や山中を 1 年かけて探しましたが、見つかりませんでした。しばらくして、あるお寺の住職が「それは尾道市刑務所（本土側）近くの山側の市営共同墓地の一角にあったものだ」と伝えてきました。現場に行ってみると、墓標らしき物は既になくなっていましたが、近くで畑仕事をしていた農家の方に話を聞くことができました。彼は「ここに墓標らしきものが昭和 22 年頃まであったが、2、3 人の人が来て墓を掘り起して、どこかに持って行ったようだ」と言いました。彼らの遺骨は現在、横浜の英連邦戦死者墓地に移されています。



市営共同墓地の捕虜の墓標

それから、南沢満雄さん（向島キリスト教会の元牧師）と私（小林）の間で、これから毎年のように英国から訪問団が向島に来るらしいので、亡くなった英国兵捕虜 23 名のメモリアルプレートを作った方がいいのでは、という話が持ち上がりました。南沢さんはキリスト教会からの支援だけでなく、一般の人たちからも寄付金を集める中心になりました。



英国兵のメモリアルプレート



平和と友好の記念碑 2002 年 3 月

そして 2002 年 3 月、捕虜収容所の建物があつた向島紡績（株）の協力を得て、その赤レンガ壁にメモリアルプレートを取り付けました。向島中学校近くの小公園には「平和と友好の記念碑」も建立されました。そして、英国からの訪問団と共にプレートと記念碑の除幕式を行いました。偶然にも、POW 研究会が発足したのも同年同月でした。

現在までに向島を訪問した

英国兵捕虜及び遺族は、合計 180 人にのぼります。

英国兵のメモリアルプレートを設置したその年、向島にいた米国兵捕虜 Harold Baker 氏(2004 年 12 月没)より突然手紙が届きました。手紙には、米国兵 100 名のうち 1 名 George B. Scott が 1945 年 2 月 13 日に亡くなっていることが記されていました。私たちはそこで初めて米国兵捕虜の死を知ったのです。また、日立造船向島工場で強制労働をさせられていた時、やさしかった日本人の担当班長福岡薫さんのことも書いてありました。以上の 2 件は、向島捕虜 Francis Malikowski 氏(1997 年没) の弟で、近く訪日を予定している Edward Malikowski 氏からの手紙にも書かれていました。

亡くなった米国兵 Scott 氏をメモリアルプレートに追加したいという思いは、常に我々の念頭にありましたが、2011 年 12 月、向島紡績(株)の廃業が決まり、それに伴って赤レンガ壁に設置した英兵捕虜のプレートも撤去せざるを得なくなりました。95 年の歴史を持ち、広島県の近代産業遺産にも登録されていた赤レンガ壁については、当初「保存すべきだ」という声も多々聞かれましたが、民間会社の所有物でもあり、営業上の理由から解体・撤去されることになりました。

しかし幸いにも、跡地を引き継いだスーパー「エブリー」のご厚意により、敷地の一角を無償貸与してもらえることになり、これを機に米国兵捕虜のプレート設置への機運が一気に高まりました。そして、向島紡績(株)の廃業から 1 年 3 カ月を経て、新たなプレートが完成したのです。

収容所跡地には今、「エブリー」のほか、薬店、100 円ショップが営業しています。従って、収容所に関連した建物は一切残っていませんが、2 つのメモリアルプレートがその歴史を語り継いでいくことでしょう。



米国兵のメモリアルプレート